

令和３年度 大泉中学校 学校経営計画	
Ⅰ 学校教育目標	
１ 健康～心豊かで健康をめざす人（忍耐力をもち、明るく秩序ある学校生活をおくる生徒） ２ 誠実～自分も他人も大切にすること（自他ともに互いの良さを認め合い、真剣、前向きに取り組む生徒） ３ 努力～進んで学習に励む人（主体的・対話的な学びに率先して取り組む生徒）	
Ⅱ めざす学校像、生徒像、教師像 「人は学ぶ」「人は変わる」「人は輝く」	
○学校像	・ 信頼と誇りのある学校 ・ 感動、感謝、モチベーション（やる気）を維持する学校 ・ 明るく、元気なあいさつと返事がしっかりできる学校
○生徒像	・ 主体的・対話的な学びに率先して取り組む生徒 ・ 自他ともに互いの良さを認め合い、真剣、前向きに取り組む生徒 ・ 忍耐力をもち、明るく秩序ある学校生活を送る生徒
○教師像	・ 主体的・対話的で深い学びの実現をめざし授業改善を追求する教師 ・ 協調と協働を根底に置き、情熱と使命感に燃える教師 ・ あきらめない生徒指導に徹し、信頼される教師
Ⅲ 学校の現状と課題	
<学校の現状> 新１年生 276 名（通常 258 名、特別支援学級 18 名）を迎え、今年度の生徒数は 765 名、通常 20 学級、特別支援 6 学級、合計 26 学級の大規模校でスタートした。新型コロナウイルスの影響により様々な制約はあるものの、始業式と入学式を予定どおり実施し、落ち着いた新年度を迎えることができた。 新入生と上級生との対面式は、質が非常に高く、「上級生が下級生の見本になる」「後輩は先輩を見て学ぶ」という本校の伝統が堅持されている。特にその傾向は 10 組（特別支援学級）において顕著である。 また、各教科の授業開きも順調で、これは、ここ数年授業開始 2 分前着席を徹底し、チャイムと同時に授業を開始するという日々の授業規律を徹底して行ってきたことや、全教職員が担任と副担任の別なく協調と協働を第一として個々の生徒としっかり向き合った指導を、日々積み重ねてきた不斷の努力の結果であると認識している。 昨年度実施した学校質問紙調査における「学校生活は明るく活気があり楽しいですか」という項目に対しては、生徒の肯定的評価 90.0%（前年度比 3.6%増）、保護者の肯定的評価 89.6%（前年度比 1%増）で、一昨年度に比べてわずかではあるが数値が上がった。コロナ禍という状況を踏まえた上で、生徒・保護者・教職員三位一体の教育活動が信頼関係を保ちながら実施できていると認識している。 <課題> 昨年度の学校生活全般に対する生徒対象質問紙調査(14 項目)の肯定的評価平均は 87.0%(前年度比 1.8%減)ではあったものの高水準を維持している。しかしながら、一方で約 13%（各学級 3 名程度）の生徒が、学校生活に対して何らかの不応適をおこしているという課題がある。この数値を可能な限り少なくしていくとともに、肯定的評価の数値的上昇を重点課題のひとつとする。そのために、全教職員で一人一人の抱えている課題とより一層向き合い、自尊感情、自己肯定感を高めていく指導をすすめていく。 また、学力に関して、生徒対象授業評価質問紙調査(前年度は 10 月に 1 回のみ実施)の結果、「授業がわかりやすい」に対する肯定的評価の割合は 90.6%(昨年度比 1.3%増)で、きわめて高水準であった。今後は、授業に関する 4 項目平均の数値(84.2%)を向上させていく。	
Ⅳ 中期経営目標（３～５年を見通した目標や方策）	
１ 学力向上～授業内容の充実 ① 大泉中授業スタンダード(令和３年度版)を踏まえた「わかる授業」「魅力ある授業」の展開を図るとともに「主体的・対話的で深い学びの実現」を追求する授業改善を図る。 ・ 同僚性の向上～学習指導要領、小中一貫教育を意識した全教員による研究授業を計画的に実施するとともに、授業改善計画作成や授業後の教科部会を通じて授業力向上を図る。 ・ ICT 機器の効果的な利活用（特にタブレットパソコン）を通じて、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図る。 ・ 授業力の向上～全教員が指導案作成の下、年間 2 回以上研究授業を実施する。	

・授業評価～生徒対象質問紙調査を実施し4項目(4～7)における肯定的評価平均で90%を上回る。また、一方で、質問3の家庭学習に関する肯定的評価で55%を上回る。 ・ICTの効果的活用を学ぶ校内研修を実施(年間1回以上)するとともに、タブレットパソコンの利活用を踏まえた大泉中授業スタンダード(令和3年度版)を作成する。	
② 新教育課程完全実施にともなう年間指導計画と評価計画の作成	
③ 基礎学力の保証	
・「授業がわからない、ついていけない」という生徒に対する学習活動(補習含む)を行う。 ・大泉中新授業スタンダードを踏まえたユニバーサルデザインの授業展開を推進する。	
④ 学習意欲の向上	
・キャリア教育を充実し、自分らしい生き方の実現(自己実現)と学習意欲が結びつく指導をする。 ・各種検定試験を奨励し(英検、漢検、数検)、少なくとも3教科への学習意欲が高まる工夫をする。	
⑤ 習熟度別少人数授業の工夫	
・数学科で継続実施、より良いあり方を工夫していく。	
2 秩序と活力のある学校生活の堅持	
・下級生が上級生から学ぶ、上級生が下級生の見本となる学校風土を堅持する。 ・各種行事を一層充実し、「感動・感謝・モチベーション」という良いサイクルを維持する。 ・特別支援学級と通常学級との交流や学習活動をとおして、互いに認め合い、励まし合い、高め合う人間関係を構築する。 ・いじめ、不登校等の課題に向き合う組織として生活指導部会(いじめ対応)、教育相談部会(不登校対応)と特別支援教育推進委員会(特別な支援を要する生徒への対応)の充実を図る。	
3 特別支援教育の充実	
・10組と通常学級との交流を推進する。 ・特別支援教室(マイステップアップルーム)の充実を図る。	
4 小中連携とOJTを生かした教員一人一人の指導力向上	
・「教員の授業力向上」と「学びの連続性」を軸足とした小中一貫教育の施策を更新する。 ・若手教員が主幹教諭・主任教諭から指導力を学ぶ機会を意図的、計画的に設ける(OJTの推進)。 ・教職員一人一人に対して組織を大切に、組織で職務にあたると意識を高め、学校運営への参画意識を高める。	
5 道徳教育の充実	
・道徳教育推進教師を中心として、意図的・計画的な道徳教育の組織的展開を図る。 ・「特別の教科 道徳」の実践と道徳授業地区公開講座充実による地域・保護者との連携を強化する。	
6 オリンピック・パラリンピック教育の推進	
・4つのプロジェクト(東京ユースボランティア、スマイルプロジェクト、夢・未来プロジェクト、世界ともだちプロジェクト)を引き続き推進する。 ・各教科で関連学習の推進を図る。 ・オリンピック・パラリンピアンを題材にした講話を授業で扱う。	
V いじめ・不登校への組織的対応	
項目	組織的対応の共有事項
① いじめ	・「いじめは絶対に許さない」という認識に立ち、毅然とした指導を行い、自他の生命を尊重する心を育てる。 ・「大泉中学校いじめ防止基本方針」に基づき、いじめに繋がる小さな芽を見逃さない指導体制を全教職員で共有する。 ・年間3回のいじめアンケートを生かし、未然防止を最重要取組課題として早期発見・即時対応を図る。

② 不登校	・生徒、保護者との信頼関係を構築する。 ・担任任せにするのではなく、副担任を含め学年で組織的な対応をする。 ・原則として定期的に家庭訪問する。または、定期的に学校に登校するように促す（登校時間等については個別に配慮する）。 ・教育相談部会（毎週実施）で、すべての不登校（傾向）生徒に対して、SC や心のふれあい相談員、トライやSSWr 等、個々の状況に応じて考えられる手立てを講じる。	
Ⅵ 体罰・暴言への組織的対応		
項目	組織的対応の共有事項	
体罰・暴言	・「体罰・暴言は子どもの心を傷つける卑劣な行為である」とともに「体罰は自分の指導力のなさを露呈するものである」という共通認識の下、体罰根絶に向けた共通実践を実施する。 ・指導困難な生徒への指導に関しては、個人ではなく組織で対応していく。	
Ⅶ 令和３年度の達成目標と具体的方策		
重点的な取組事項－１		学力向上～何を学んで、何ができるようになったのか。
目標項目	達成基準	具体的な方策
① 大泉中授業スタンダードを踏まえた「わかる授業・魅力ある授業」の展開と「主体的・対話的で深い学びの実現」をめざした授業の追求	・全教員が年間２回以上指導案(略案可)をもとにした校内研究授業を行う。 ・研究授業後に教科部会で協議会を行い同僚性の向上を図る。 ・全校生徒による年間２回の授業評価実施（１・２学期に各１回）。 ・評価項目（４～７）の肯定的評価平均 90%以上(昨年度 84.2%) ・質問項目３（家庭学習に意欲的に取り組んでいる）の肯定的評価 55%以上（昨年度 52%） ・ICT 活用(特にタブレットパソコンの利活用)を推進していくための校内研修会を年１回以上実施	・１学期に１回目、２学期に２回目を行う。 ・２回目は教科部会全員で授業観察し授業内容について協議会を行う。 ・授業評価結果を分析し、授業改善を推進する。 ・２学期質問紙調査の評価を、３学期以降の授業改善に生かす。 ・ICT の効果的な活用方法について教科を越えて高め合う風土を醸成する。
② 新教育課程を踏まえた年間指導計画・評価計画の作成と実施	・新教育課程完全実施を意識し、年間指導計画と評価計画を事前開示。 ・評価の信頼性・妥当性を追求する。	・保護者会において配付する。 ・校内研修会を実施。教科部会の充実。
③ 基礎学力の保証	・確認テストや小テストを実施し、できなかった生徒への追指導を行う。 *「やればできる→次もやってみよう」という学習モチベーションの向上を図る。 ・５日間の夏季補充教室を実施する。	・基礎的な内容に焦点をあて確認テストや小テストを実施する。 ・夏期休業に入る前に生徒の選抜、補充学習内容の精選
④ 学習意欲の向上	・キャリア教育の充実 ・考査前補充教室（任意設定） ・各種検定試験については、可能な限り継続して受検を奨励（参考数値：昨年度３種合計 731 名）	・「働くこと」への関心意欲を高め、学習意欲の向上を図る。 ・「よくわからない」生徒対象 ・「もっと学びたい」生徒対象 ・積極的な受検の奨励
⑤ 習熟度別少人数授業の	・より効果的な展開の仕方を試行し	・２、３年で習熟度別少人数授業を展開

実施（数学）	ていく（2 学級 3 展開と 3 学級 4 展開の併用）	する。 ・数学科の学習支援講師を活用し、1 年生 T T として活用する。
重点的な取組事項— 2		
目標項目	達成基準	具体的な方策
① 人権尊重に配慮した個別指導	・年度当初に全生徒対象の教育相談 ・年 2 回の個別面談を実施する。	得た情報を組織で共有し、即時対応を図る。
② 達成感のある行事の推進	年度末の質問紙調査で、肯定的評価 90%以上を堅持する。	二大行事(運動会・合唱コンクール)を推進する。
③ 不登校生徒	・キャリア発達(自分らしい生き方を実践していく過程)への歩みをやめてしまう生徒 0 人。	教育相談部会を充実し、個別のアセスメントを作成し、PDCA で改善を図る。
④ 情操教育の充実	年度末質問紙調査項目「楽しい学校生活」90%以上を維持(昨年度 90.0%)	めりはりのある教育活動の展開。
重点的な取組事項— 3		
目標項目	達成基準	具体的な方策
・10 組と通常学級との生徒交流	・学校評価質問紙調査「10 組と通常との交流は十分行われている」に関する肯定的評価 80%以上（昨年 77.1%）	・今年度もボッチャ交流を継続実施 ・他にも効果的な交流の在り方を分掌組織で検討して実施。
・特別な支援を要する生徒（通常級）にも対応できる授業の工夫	・ユニバーサルデザインの授業を実施する。 ・特別支援教育推進委員会の定例実施と個別指導の必要な生徒への支援計画を作成する。 ・校内研究授業の実施（年間 1 回以上）	・特別支援教育推進委員会発信による具体的な提案（教室環境のユニバーサルデザイン化等）と全教員の共通認識を向上させていく。 ・特別支援教育推進委員会での検討。 ・10 組の研究授業を全教員で参観する機会を設ける。講師を招聘して通常学級における特別支援教育を踏まえた研究協議を行う。
・特別支援教室の充実	・特別支援教室利用に関する課題発掘とその改善策について全教職員の共通理解を図る機会を設ける。	・特別支援教育推進委員会の定例実施。 ・全教職員に対して支援教室利用に関する大泉中ガイドライン浸透を図る。
重点的な取組事項— 4		
目標項目	達成基準	具体的な方策
① 全教科の連携による授業力向上	コロナ禍ということを考え、今年度について年間 2 回の研究協議会実施を原則とする。	・作成した小中のカリキュラム連携の見直しと確認。
② 生徒による授業評価を生かした授業改善	年間 2 回（1 学期末・2 学期末）授業評価を実施する。その結果は教員個々が授業改善の手立てとして活用する。	・集計結果を教員にフィードバックし、経年で自己の授業評価を把握し授業力の向上に役立てる。
重点的な取組事項— 5		
目標項目	達成基準	具体的な方策
「特別の教科 道徳」のさらなる充実	・「特別の教科 道徳」の内容充実 ・意図的、計画的な 35 時間の授業	・ローテーション方式の授業展開を継続実施する。